「チーム学校」として小学校専科教員ができる子どもへの援助の可能性

学籍番号　１９９２２１
氏　　名　本多 三四郎
主指導教員　　柿 慶子

１．問題の所在と目的

現在小学校では，いじめ・不登校・校内暴力や特別支援教育の充実等，教育課題は複雑化・多様化している。こうした課題の解決に向けて「チームとしての学校」（以下，「チーム学校」）において，児童を援助する取り組みが進められている。しかし，「チーム学校」のメンバーとして小学校専科教員からみた支援の在り方に関する研究は，ほとんど見られない。専科教員は各クラスの授業を担当し，それぞれのクラスの雰囲気の違いを感じやすい立場におり，学級崩壊やいじめ，不登校の早期発見等，「チーム学校」のメンバーとして専科教員ならではの支援ができると考える。以上のような問題意識を基に，本実践課題研究では，「チーム学校」のメンバーとして小学校専科教員が加わることにより，子どもたちへの援助に関して果す役割やどのような効果が期待できるのかについて検討していくことを目的とした。

第１章では，学校現場の状況について，教員がおかれている現状やチームとしての学校における専科教員の強みについてまとめた。そのうえで，　現在あまり連携が進んでいない小学校の現場においては，「小さなチーム学校」を構築することから出発することが有効なのではないかと考えた。このような考えのもと、専科教員の立場からできる子どもへの援助の可能性について学校実習を通して検討していくこととした。

２．学校実習における実践内容と研究の結果

第２章から第５章では，基本学校実習Ⅰ～発展課題実習Ⅱにおいて，それぞれの実践内容とそこから見えてきた成果と課題，そしてその課題の解決のための計画と実践を繰り返すという PDCA サイクルでの実践研究についてまとめた。

基本学校実習Ⅰでは，授業観察や教職員と話し合いの中から，実習校における教育課題の把握を行った。様々なニーズを抱えた児童がいることや「チーム学校」としての連携が取りにくい環境になっていることがわかった。特に実習校における児童は，勉強に対するストレスが強く，実習校ならではの教育課題があることがわかった。そのこと踏まえて，専科教員の立場から子どもへの援助方法を明確化し，援助計画を立案・実践していく必要性を感じた。その際，一人ひとりに合った援助方法を検討するために，日々の児童の様子を記録し，援助を行う前後の変化が把握できるようにしていくこととした。

基本学校実習Ⅱでは，援助ニーズのある児童のアセスメントを行い，その結果を基に「チーム学校」として学級担任や専科教員，養護教諭，特別支援教育コーディネーター（以下，特支Co），スクールカウンセラー，特別支援教育の支援員等，幅広い学校関係者との連携を行い，情報共有や指導方法の見直し，統一を行った。関与観察では，授業観察や「プロセスレコード」の作成を行い，援助が必要な児童の実態把握や援助方法について，学級担任や特支Coと検討し，援助計画の立案，実践を行った。このように「チーム学校」として様々な教職員や専門家との連携をしていく中で，特支Coの役割に着目した。専科教員は全学年や全クラスの授業を担当し，学校全体の子どもの様子を把握できる強みを活かして，特支Coの役割を担うことで，特支Coがもつ課題を解決し，円滑な連携や対応ができると考えた。また，クラス替えの際も学級担任や管理職だけでなく，各クラスを担当する専科教員が介入することで，他のクラスの状況が分からない学級担任にアドバイスしながら，協力して次年度の教員に引き継ぎを行うことができると考えた。

発展課題実習Ⅰでは，「チーム学校」の一員として専科教員が果たす役割について，実習校に勤務する教職員が普段どのように考えているのかを聞き取るインタビュー調査（半構造化面接）を実施した。分析は質的研究の中でもカテゴリー化の手法である KJ 法を用いて行った。専科教員が学級担任に望むことと，学級担任が専科教員に望むことの双方から共通して，「子どもの情報共有」に関することが多く語られた。しかし，互いに「子どもの情報共有」を望んでいるにもかかわらず，実行できていないことが明らかになった。これらのことを踏まえて，学級担任と専科教員の情報共有シートを使用していくことで，それぞれが望む連携が可能になると考え，次年度の引き継ぎにも役立つ情報共有シートを作成し，活用していくこととした。

発展課題実習Ⅱでは，筆者が授業を担当している学年３クラスの中で，専科教員からみて援助ニーズの高い児童や学級担任が気になる児童について情報共有を用いて連携し，お互いができる援助を立案し，実践してきた。学級担任との連携を通して情報共有シートを改善していくとともに，新たにスクリーニングシート（YOSS）を導入した。スクリーニングシート（YOSS）を活用することで，若手教員や専科教員も一緒になって児童生徒全員の実態を共有でき，複数の客観的な視点により一人では気づけないようなことにも気づくことができることから，子どもへの援助の可能性は広がると考えた。

３．総合考察

第６章では、本実践課題研究の結果から，「チーム学校」のメンバーとして小学校専科教員ができる子どもへの援助の可能性において，以下のようにまとめた。

①学級担任と専科教員が指導方法や援助方法を統一することにより，児童も混乱せずに効果的な支援が期待できる。

②専科教員が特別支援教育コーディネーターの役割を担うことで，円滑な連携や手厚い対応ができる。

③情報共有シートとスクリーニングシート（YOSS）を併用することで，全児童の実態把握や多角的な視点からの議論，これまでに行われてこなかった専科教員同士の次年度の引き継ぎが可能となる。